

# ぼくたちの太陽

泡坂妻夫



ぼくたちの太陽

江苏工业学院图书馆  
藏书章

泡坂妻夫

光文社

## お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

## ぼくたちの太陽

一九九一年 一月三〇日 初版一刷発行

著者 泡坂妻夫あわさかつまお

発行者 大坪昌夫

発行所 株式会社光文社

東京都文京区音羽二―二―一三  
電話 東京(〇三)三九四二―三三四一(代)  
振替 東京六一一五三四七

印刷所 公和図書

製本所 牧製本

定価一、三〇〇円

(本体一、二六二円)

目次

雨あめ女おんな

蘭の女

三人目の女

ぼくたちの太陽

危険なステーキ

凶手きようしゅの影

7

39

53

83

145

199

装  
幀  
村  
上  
豊

ぼくたちの太陽

泡坂妻夫  
あわさかつまお









雨<sup>あめ</sup>

女<sup>おんな</sup>

ロビーの中央あたりで、羽を大きく拡げた鷲が岩から飛び立とうとしている。そのガラスケースの前に、晴れ着を着た十五、六人が華やかな笑い声を立てていた。

結婚式の披露宴が終わったところらしい。女性たちは色とりどりの着物と花束。男たちは黒のスーツ、足元にはホテルの紙袋が置かれている。

向津は無意識に新郎新婦の姿を探したが、着替えに行っているのか、もう旅行に出発した後なのか、主役らしい者は見当たらなかった。

向津がその人たちの傍を通り過ぎようとしたとき、ふと、一人の女性が気になった、やや小柄だが、美しさが一廻り大きく見せるといったタイプの女性で、形の良い目と尖った顎に見覚えがあった。向津は記憶をたぐり出そうとして、さり気ない態度で立ち止まり、ポケットから煙草の箱を取り出した。

五つ紋の黒の江戸襦づまで、唐子人形からこを散らした裾模様。帯は西陣、亀甲を大きく銀糸で織り出した柄だった。年齢は三十の後半から四十ぐらい、と思ったとき、向津が知っている一人の女性と姿が重なった。

——雨女。しかし、雨女がどうしてこんなところに来ているのだろうか？

「お仲人さん、車は？」

と、見るからに世話焼きらしい肥った女性がその雨女に声を掛けた。雨女は肥った女性の方に顔を向けて何か言っている。

雨女が結婚式の仲人を引き受けているとすると、夫と一緒にはずだ。だが、雨女の傍にいますは、瘦せた上品な白髪の男だった。向津が知っている雨女の夫の記憶はあいまいだが、違うことはすぐに判る。まず、年齢が親と子ほどの差がある。

雨女は肥った女性と二言三言話してから正面に向き直った。そのとき、向津と目が合った。だが、雨女の表情には少しの変化も現われなかった。

——矢張り、他人の空似かな。

向津は吸いさしの煙草を灰皿の中に捨てた。

玄関の方から、黒のスーツを着た若い男が、小走りやって来て、白髪の男の前で一礼する。

「鷺尾先生。お車が参りました」

声を掛けられて、男は持っていた黒いステッキに力を入れる。少し、足が不自由なのだ。雨女は男に腕を貸しながら、絨毯の厚い質感に気を配るようにして、ゆっくりと若い男の後に従った。

向津はガラスのドアの向こうで、二人が黒い乗用車に乗るまで見送っていた。  
なにか、気になってならない。

二人が呼ばれた、鷺尾という名にも心当たりはない。向津が知っている雨女と別人だとは思うのだが、雨女の記憶がはっきりするに従い、今の女性と雨女とが分けられにくく感じてしまう。といって、当然、化粧や着物が女性の感じを変えることもある。二人が同一人物だと断定することもできない。

向津の先輩が、ある文化事業団の賞を受けることになった。永年、凶悪犯逮捕の実績をあげ続け、市民の安全を守って来たことが認められたのだ。その、祝賀パーティの日だった。

受賞者はこの人が本当に何人もの犯罪者を取り捌いてきたのかと思うほど温厚な感じの人で、こういう晴れがましい主役を務めるのは苦手らしく、始終、緊張したままだった。

他の各専門分野の受賞者もいて、その人たちの挨拶はどれも興味深いものがあつた。老人医学の医者、江戸指物の職人、特殊な昆虫を追っている登山家、園芸家……

パーティ会場は大勢の人たちで賑やかだった。あちこちでカメラのフラッシュが光り、その間を縫うようにして、ライトを先導するビデオカメラが動いていく。

パーティが終わって、ホテルを出ると外は雨になっていた。

だが、向津は雨を見ても、ホテルに着いたときの小さな出来事はもう思い出さなかった。雨女のことかひょっこり頭に浮かんだのは家に戻ってからだった。

向津の家は私鉄の駅の近くで、妻の民江が小さな手芸店を開いている。

間口は狭いが、ちょっとした奥行きがある。向津の父親が残してくれた家で、二階はアパートに造り、四所帯ほどが住んでいる。表は理髪店に貸していたが、少し前、近くに広い店を見付けて越して行つた。その後を子供に手が掛からなくなった民江が改造して自分の店にした。小さいころから、民江は自分の店を持つのが夢だったのだ。

雨だったので、向津は裏へ廻らず、まっすぐ店に飛び込んだ。

「天気予報、外れたわね」

ぼんやり外を見ていた民江が言った。

「さっき、雨女が店の前を通って行つたわよ」

このところ、雨が多い。

鉢植えの真つ白なサツキが、満開になっている。

雨女というのは民江が勝手に付けた名だ。

向津は一度だけ雨女と話をしたことがあるだけ。本当の名は知らない。

二月、立春のころで、強い雨の日曜日だった。

不動産周旋屋の小北谷こきたにから電話があつて、向津のアパートを見たいという客がいるので、連れて行きたい、と言った。たまたま、民江が留守だったので、向津が部屋を案内することになった。小北谷と一緒に来たのは、若い夫婦だった。二人はオレンジ色の女物の傘に身を寄せ合っていたが、男の背が高いために、顔を濡らさないのがやっとだった。

男は発育のいい身体をどう使つていいか持てあましている、といった感じで、まだ学生学生した態度だった。だから、向津の第一印象は、二人は夫婦というより、雨女が弟の下宿を探しに付き添つて来た姉のように見えた。

向津が二階の空き間に案内すると、男の方が小まめに部屋の間取りや窓の向き、風呂場や勝手を見て廻った。そして、

「今のところよりも、だいぶ広い」

あるいは、

「駅にも近いしね」

今、住んでいるところと比較するように、感想を雨女に伝えた。それは、ほとんど好意的な言葉だったから、向津は十中八九は決まったようなものだ、と思った。

だが、雨女の方はあまり部屋には関心がないように見えた。ぼんやりと窓の傍に立ったまま、男の言葉にあいまいな返事をしていた。雨女は、帰り際、ガラス越しに外を見ながら、

「雨の音が、ひどいのね」

と、ぼつんと言った。

窓のすぐ下はトタン屋根だった。隣りに店を出している自転車屋の物置だ。物置は平屋だから、近所にある同じようなアパートに較べたら、陽当たりは申し分ない。向津は陽当たりより雨の音を気にする女性の気持ちが判らなかつた。

入居者というのは妙なことを気にすることがある。普通の人なら何とも思わない点に我慢がでない。向津はそれをよく承知していたから、その言葉を聞いて、もしかすると、これはまともでないかな、という考えに傾いた。

その予感が当たって、よく相談して返事をすると言つて帰つて行つた二人から、何の音沙汰もなかつた。

一週間ほどして、向津の店の前を通り掛かつた小北谷が、店にいた向津を見て入つて来て、あの二人は坂上に新しく出来た、ワンルームマンションに話が決まつた、と言つた。

向津の家は駅から二、三分だが、そのマンションは十分以上歩かなければならない。部屋だつて向津のアパートに較べれば、ずっと手狭で、家賃もかなり高いはずだ。

「今の若い者って、皆、そうなんですよ」

と、小北谷が言つた。

「木造モルタルで、全部が畳敷きのアパートなんて、恰好が悪いと思うんでしよう」

言われると、向津のアパートにいる住人は、皆、中年以上だった。なるほど、若い者は住み心地よりも見てくれを大切にする。

そして、小北谷は付け加える。

「ねえ、そろそろ、いい時期じゃないんですか」

アパートを建て替える時期だというのだ。

駅に近いから、向津が住むほか全部を貸店舗にしてしまえば、いくらでも借金など返すことができる。そんなことは子供にでも判る理屈だが、向津は石のビルに住むことと、莫大な借金をすることがどうしても乗り気にはなれない。その内、子供までが生意気になって、マンションの方がいいと言いつつ決まっているが、向津はそれでも首を縦に動かすことはあるまいと思う。

その点、女は怖いもの知らずで、いつも夫の慎重さに業を煮やすことの多い民江は、雨女がマンションの方に決めたと聞いて、

「奥さんの方、凄く美人だったというじゃない。そんなお客さんを逃がして、残念でしょう」と、言った。

一度、民江と連れ立って駅に向かっているとき、傘をさした雨女と出会ったことがある。相手は向津を覚えていて、軽く会釈して通り過ぎていった。ただ、それだけだったが、民江は見逃さなかった。

「誰？ 今の人」

「……あれが、例の、家のお客さんになり損なった奥さんだ」

「そうだったの……あの人なら、矢張り家のぼろアパートとじゃ映りが悪いわ」

「そうかな」

「確か、その日も雨だったでしょう。わたしは傘を持たずに出たから、よく覚えている。あの人、雨女なのね」

例のワンルームマンションへ行くには、向津の店の前を通らなければならない。その後、民江はときどき外を通る彼女を見掛けるが、その日は必ず雨だ、という。

「そういう人がいるものよ。竜は雨を呼ぶというから、辰年の生まれかしら」



向津はそうは思わない。自分の仕事か勤め先が雨になるといけなくなる種類のものなのだろう。或いはいつもなら車を使うのだが、雨の日は電車にするのか、などと漠然と考える。

祝賀パーティーの日、その雨女とよく似た女性とホテルのロビーで出会い、家に帰って来ると、民江が、さっき雨女が店の前を通って行った、という。

向津はそれを聞いて新しく好奇心を起こした。

「雨女の名を知っているかね」

「ええ。赤橋さんでしょう」

「誰から聞いた？」

「いつか、小北谷さんがそう言っていたわ。知らなかった？」

「うん……まあ」

向津はホテルのロビーにあった鷺の剝製を思い出した。鷺尾と赤橋では似ても似付かない名だ。それから、半年ほど経った十二月の半ば、鷺尾拾二郎という男が自殺をした。だが、向津はその名を言われても、祝賀パーティーの日にホテルのロビーで出会った鷺尾とはすぐに結び付かなかった。

長い間、警察で仕事をしていても、自分の知り合いが事件に関係するようなことはまずなかったが、鷺尾拾二郎の死は、その例外中の一つだった。

電話で警察に変死を報らせたのは、大山町に住む開業医だった。少し前、自分のところの患者の家族が、病人の異変を電話で言ってきたので、駆け付けてみると、病人は首を吊って自殺していた、という。

早速、警察の衛生技師がその家に行って事情を訊く。